河童・ミントゥチ考

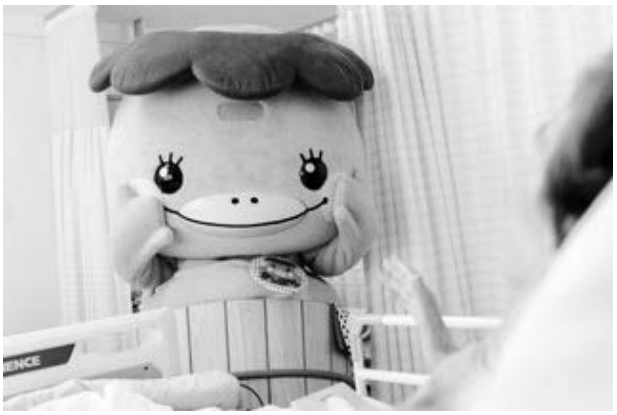
札幌市医師会
定山渓病院
笹岡（ささおか）　彰一（しょういち）

里山は日本の原風景のひとつと言われる。田畑や鎮守の森に茅葺の集落が隣接して小川が流れる。里山の奥には深い森が広がり、川の一部は早瀬をなし、渓谷を作る。人の手が届かない森や河川には動物の生態系が形成され、河童の棲家でもあった。元来、中国で沙悟浄の別名を持つ黄河の神である河伯が、日本に６～７世紀頃に渡来して河童になったとする説がある。日本の河童は九州発祥とされ、場所は特定されていないが、田主丸町巨瀬川、武雄市潮見川、八代市前川が候補とされている。証として伊万里の松浦一酒造に行けば河童（河伯）のミイラが見学できる。時代とともに河童は全国に棲家を広げ、今も上高地河童橋、遠野カッパ淵など名を残して、それぞれ芥川龍之介の「河童」、柳田國男の「遠野物語」の舞台になった。河童は水神の依代とされ、人間の生活圏とは隔絶されていた。しかし、７世紀後半には畿内で里山森林伐採が始まり、人口増加対策や寺社城郭造営のために室町時代には全国的に森林は破壊された。そのため河童の生活圏に人間が入り込むようになると、水難事故が増えて河童は恐れられる存在になった。河童は水辺にいる人や馬もしくは泳いでいる人を水中に引き込み尻子玉を抜く。一方、河童を助けた人には魚を贈り、薬の製法を教えた。京ヶ瀬村猫山（現阿賀野市）では悪戯をする河童の腕を切り落とした百姓に詫びとして秘伝薬を伝え、末裔は新潟市の猫山宮尾病院で「猫山アイス」と名付けて製法を守った。水に溶いた粉末を練って和紙にのばすことで打ち身・くじきの患部に貼る湿布であるが、惜しくも平成元年に製造は中止された。明治以降も軍需に関連して、ほとんどの里山は原型を失い、心の原風景になった。そして、河童は未確認生物と言われ、伝説になった。

北海道はブラキストン線で本州とは陸上動物の分布を隔てる。室町時代より渡島半島海岸沿いに領主層による道南十二館が造られ、上ノ国や江差に和人が入植したが、すでに道内には多くのアイヌコタンがあった。1877年に来道した宣教師ジョン・バチェラー著作の蝦和英三対辞書（アイヌ語・日本語・英語辞書）に半人半獣の霊物としてミントゥチが記され、善良な人魚ピリカ・ミントゥチも記した。バチェラーは有島武郎や新渡戸稲造の支援を得て、アイヌ民族への生活支援や教育活動に尽力してアイヌ施療病室という無料診療所を開設した。今も彼の住居は北大植物園にバチェラー記念館として保存されている。ミントゥチは ミンツチ、ミンツチカムイとも言われ、金田一京助や更科源蔵らのアイヌ民俗調査により道内各地のアイヌコタンでの目撃談を収集した。人間の子供程度の背丈で、ウミガメのような皮膚を持ち、足は鳥や鎌の形に似て、水辺に棲む。漁運を授けることもあるが、水死者を出したり疫病を広めたりして畏れられた。ミントゥチは人魚に近い河童の亜種であろう。アイヌの娘に婿入りした話もあり、アイヌ生活圏の近くに存在した。実際に明治時代の定山渓で川釣りをしていた青年が川底に引き込まれて行方不明になる事件があった。青年は女河童と結婚して暮らしていると父は夢で知り、この川はかっぱ淵と呼ばれるようになった。伝承でのミントゥチは全て男であり、この事件はピリカ・ミントゥチなのだろうか。定山渓は1866年にアイヌの案内で定山僧侶が源泉を発見した地で、アイヌの集落があった可能性がある。今は近くの小金湯にアイヌコタンが復元された。

戦後は河童・ミントゥチの時代になった。1965年に定山渓かっぱ祭りが始まり、おおば比呂志はかっぱ淵の手前にある「かっぱ大王像」のデザインをした。2008年に水木しげるは北海道代表の妖怪として、劇場版ゲゲゲの鬼太郎でミンツチを活躍させた。2011年、かっぱ淵に定山河童小吉兵衛が住んでいることが発見された。2012年に南区役所から特別住民票が交付されている。今では「かっぽん」の名で定山渓温泉PR隊長の任を得て活躍している。渓仁会定山渓病院では毎年秋の病院祭に「かっぽん」を招聘し、患者さんたちの癒しになっている。

（本文は京都市伏見の黄桜記念館Kappa Galleryで着想を得たものです。病院祭については令和７年度の札幌市医師会南区支部だよりに詳細を投稿しました。毎年秋に開催して、今年は1,300人の来訪者でした。ぜひ見学に来てください。）



病院祭での「かっぽん回診」